ベルクソンの物質論と個体化

――『意識の直接与件についての試論』、「三つの形而上学講義」、および『物質と記憶』における「質的多数性」の役割――

永野拓也

はじめに

近年、ベルクソンの講義の出版にともない、ベルクソンの物質論にも新たな側面が指摘されている。例えば、H. Hudeは、ベルクソンの物質論には機械論的な側面があるというのである。[1]だが、ことはそれ程単純でもないように思われる。我々としては、ベルクソンにいかなる意味で機械論が関わってくるのか、確認したいところである。そうしてみるとわかることだが、一八八九年の『意識の直接与件についての試論』（以下『試論』と略す）と一八九六年の『物質と記憶』に一貫していることがある。それは、物質における運動の各々が一つの全体として質的に区別され、それゆえ部分も質的に区別されるので、任意の分割を免れているということである。我々はこうした事情を、物質における個体化と呼びたい。両者の相違は、『試論』がこの個体化の働きを主観的なものにとどめるのに対して、『物質と記憶』はこれを客観にまで拡張する点である。さてそうすると、ベルクソンの物質論は、個体化の理論として、機械論のアトミズムとは異なるのではないかと思われてくる。たしかに一八九三年に行なわれた「三つの形而上学講義」（以下講義と略）では、H. Hudeの指摘するように、機械論のアトミズムが制限つきで容認されている。とはいえ、続く『物質と記憶』は講義の物質論に若干の変更を加えた上で、アトミズムをベルクソン流の個体化に還元してしまうのである。とすれば、ベルクソンは機械論を肯定したというより、これを試金石にして自分の個体化の理論を発展させたと考える方がよいのではないか。つまりそのように解釈する方が、『試論』と『物質と記憶』、及びそれら以降のベルクソンの著作のつながりを、一貫して理解できると思うのである。[2]そこで我々は以下に、『試論』、講義、『物質と記憶』の物質論を、個体化の側面を強調しながら検討してゆこうと思う。

一、空間と質的多数性（持続）――『試論』における単位の個体化

『試論』において最初に個体性が問題となるのは、数における単

位（unité）と空間（espace）との関わりをめぐってである。ここでの個体論が、『試論』を代表するものとなる。運動の個体化は、数における個体論に即して考察されるのである。

数の単位に関するここでの個体論の基本的な特徴は、個体化を精神（esprit）の働きと見る点である。この働きが無限で等質の（homo-gène）多、すなわち空間に投影されて、単位の個体性が保たれるのである。誤解してはなるまいが、空間の位置は単位の個体化あるいは区別（distinction）の原理ではありえない。たしかに単位の等質性（homogénéité）のために空間は必要かもしれない。数において各単位が互いに同一でなくてはならないからこそ、ベルクソンは「数えること（compter）」と「列挙すること（énumérer）」との相違を主張するのである。羊の群を数える場合、「我々は同意して、羊の個体差を無視し、それによって共通した働きだけを考慮に入れようとする（52/DI57）」。他方、「対象や個体に特有な姿形（上の個体差）に注意をこらすなら、我々は加算でなく列挙を行なうのである（*ibid.*）」。つまり、「我々は全ての羊を同じ像（image）（羊の等質な像）の内で数えねばならず、そうするためには結局、全ての羊を理念としての空間の内に並べねばならない（53/DI57）」。だが羊という対象の質的な差が除かれて等質になれば、もはや「それでも羊たちは、それらが空間内に占める位置によって異なっている（52/DI57）」とは言えないはずである。単位の等質性のために空間が必要だというならば、単位を個体化するのは空間ではないだろう。なぜなら、空間には無限の位置が考えられ、それ単独で対象の位置を一定の有限量によって隔てることはできないからである。たしかにベルクソン自身が誤解を招くような叙述をしており、この箇所の注では位置による区別と感覚の質による区別が対比され、前者の必要が説かれている（52/DI57）。しかし同じベルクソンが、空間そのものは無限の分割を受けると考えており、それゆえにこそ実数全体のような無限の数を考える場合にも、空間が必要だと見ているのである。「…単位というものを我々が望むだけの部分に分割できるということ、このことを我々は認めるのであるから、まさにそれゆえに我々は、単位を延長あるものと考えるのである（56/DI61）」。それならば、単位の数が有限であるときに分割を制限し、位置すら確定するのは、空間以外のなにものかでなくてはならない[3]。ベルクソンはこのものを、「知性が単位を意識的に知覚する（apercoit）単純な行為＝働き（acte simple）（55/DI60）」、「精神の単純な行為（*ibid.*）」と呼ぶのである。単位の個体化はこの行為による。

この行為と密接な関係にあるのが、持続（durée）あるいは質的多数性（multiplicité qualtative）である。質的多数性とは何か。これは数なき多数性でありながら、すでに種々の個体を含む。『試論』はこの多数性を意識と分かち難いものとみている。意識の諸状態は各々が内的に区別されると言い、この種の区別を「質的区別＝差異化（différentiation qualitative）（64/DI71）」と呼ぶ。質的区別は、例えば次のような例示によって説明される。続けざまに鳴り響く鐘の音がいくつ鳴ったのかを数えないとしても、「私はこれらの継起的な音の各々を保存し（retiens）て、他と有機的に結びつけ、私に既知のある歌やリズムを思わせる一種のグループを形成する。この

とき私は音の数が私に与えた、いわば質的な印象を、取り纏めているだけである（59/DI64）」。数としてではなくこのようなグループ（一種のメロディー）として、音の様々な数は、互いに質的に区別されるのである。例えば三つの音はあるワルツとして、二つの音はある行進曲として、という具合に。さらに、質的に区別される音の連鎖全体の内に、その要素を見いだそうとするならば、質的に区別される全体同士は共通する要素を持たないので、要素はその特定の全体の要素としてのみ存立する。三つの音と二つの音において各音は、各々の全体の内では等質な単位ではない。つまり、ある連鎖の要素同士は「相互浸透、協働、内的有機化（68/DI75）」の関係にあり、個体化されたこの有機的全体にとっての要素でしかない。「その要素おのおのは全体を表象しており、抽象的な思惟によってだけ全体から引き離される（*ibid.*）」。例えば、「微かで連続的な刺激の効果」は、「感覚がつねに同一であるとしたら極微なまま、許容できる範囲にとどまるだろう（71/DI79）」が、実際には感覚の累積は全体としての効果をその都度変化させ、したがって各々の感覚も同一とはいえないのである。このように、各全体に応じて要素を個体化する多数性が、質的多数性である。

感覚の質的多数性によって個体化が成立するのは、心理的な生が刻々と、全体としての相（aspect）を変化させる故である。つまり、心理的生の全体は、常に形成途上にある。保存される過去（先の'retiens'に注意）と新たな現在とが、常に全体を変化させるのである。こうした心理的生の全体における不断の変化は、「純粋な持続（67/DI75）」と呼ばれる。持続（durée）は通常、時間的な連続性を意味するが、ベルクソンはこの連続性を、それ自身の部分を有機的に結びつけ、変化してゆく全体として捉えているのである。従って、我々が経験する感覚の、上記のような質的多数性は、心理的生の全体の持続に参与する限りで、個体化を行うのである。『試論』において、持続はそれを確認する意識なしに存立せず、あくまで心理的生のそれに留まる（この持続の規定は、後に講義において見るように、問題をはらんでいる）。制限はあるにせよ、持続は以上のような意味での、不断に変化する全体であり、それに関わるかぎり、感覚の連鎖は質的多数性として、それ自体の要素を個体化するのである。

上の「単純な行為」とは、「ある数を得るには、この数を構成している単位の上に、次々と注意（attention）をとどめねばならない（56/DI61）」と言われるように、一種の注意力である。この注意力が意識の事象である以上、質的多数性を形成するのである。「…我々は、判明な多数性の観念すら、質的多数性と我々の呼んだものをそれと平行して考慮することなしには形成できない（91/DI87）」。具体的には、例えばうわの空で聞いていた四つの時報を反省して数えるときには、「時を報ずる音を一、二、三と私の想像力が打って行き、正しく四の数に到らぬ内は、私の感性は、答えを求められても、全体としての効果が（実際とは）質的に異なると述べてきたのである（85/DI95）」。この種の聴覚において、実際には単位は空間内に各々の位置を散布させていない（70/DI78）ので、それだけ質的多数性の働きが明らかになるのである。

従って単位は、意識がおのれの質的多数性を空間に投影すること

によって個体化されているのである。質的多数性は単位の多数性（数）でも空間でもない。しかしこの質的多数性を空間に投影して等質化し、任意の分割を想定することによって、数は成立するのである。この意味で『試論』においては、単位の個体性も数そのものも一種の虚構である。

反対に、空間内に散布している点、つまり数的な多数性に見えるものも、それに質的多数性が付随するならば、持続すなわち全体としての変化に与ることになる。この見解を導く点で、数論は同じ著作の運動論を準備しているのである。我々は次に、『試論』における運動論に目を向けよう。

二、『試論』における運動論―　持続による運動の個体化

上の数論に従って運動を考えれば、空間内の位置の区別は精神の注意力による虚構だし、時間的変化は意識事象の持続でしかないから、運動は主観的現実でしかない。外界に特定の質的多数性はないが、運動は特定の質的多数性（時間的な変化）であるから、これは外界には存在しないのである。我々が運動と呼ぶのは、持続の内で行なわれる「いわば質的な総合（synthése）、我々の感覚相互の順を追った有機化、メロディーの一節のそれに比すべき統一（74/DI83）」である。また空間内の位置はこうした質的多数性の投影に存する虚構にすぎないから、いくらでも多くの位置が想定できる。

たしかにこうした運動の主観化には利点があり、運動そのものを質的多数性と考えるかぎり、エレア派のパラドクスは運動についてのパラドクスではないことになる。空間を外界と読み替え、質的多数性を時間的変化と読み替えれば、数と同じ事情が運動にもあてはまるのである。実際、アキレスと亀のパラドクスにベルクソンが挑む場面で、議論の仕方は先の数論のそれと酷似する。ここでもベルクソンは、空間が恣意的な分割、無限の分割に適うものだということを認める。「具体的な空間の無際限な分割可能性に限界があるとする必要など全くない（76/DI85）」、「我々は…二つの運動体（アキレスと亀）の出会いが、…空間自体（espace en soi）と無際限に分割可能な空間との間の、ある隔たりを意味するのだと認める必要を、いささかも感じない（*ibid.*）」。従ってアキレスの軌跡も亀の軌跡も無限に分割されてよい。しかし現実には、アキレスは亀を追い越す。とすれば、そのためには、運動行程においてアキレスと亀の歩数が、各々有限でなくてはならない。このように歩数が有限であるのは、ちょうど単位が単純な行為によって個体化されたと同様、「アキレスの各一歩は単純で不可分な行為（acte simple et indivisible）だ（75/DI84）」からである。ここで「単純な行為」の役割は、数の場合と同様であり、質的多数性をなす「単純な行為」が空間に投影されるのである。[4] この解決をよしとすれば、ゼノンのパラドクスは運動には無関係で、「部分が全体と等しい大きさを持つ」という連続量（空間）の性質を述べたものにすぎなくなる。

しかし「単純な行為」の意味は、数の場合と運動の場合とで、完全に同一ではない。たしかに、空間の無限を限定するのが精神的な行為（およびそれが属する質的多数性）であるという点は、数にも運動にも共通である。だがそれならば、なぜ一方の行為の属する質

的多数性を、あえて「運動」、「一歩」と呼ばねばならないのか。虚構の個体（単位、位置）を形成する過程の、主観的な側面であるにとどまらないのか。このような不均衡があるからには、運動という質的多数性を主観的なものにとどめようとは、ベルクソンはほとんど考えていないと思われる。むしろ、時間の経過に伴う全体的な相の変化を、物質にも見いだそうとしているのではないか。

それが証拠に、ベルクソンは、外界の持続を否定しきることができず、一種の戸惑いすら表明している。「…諸事物は我々のように持続しないとしても、それらの内には（en elle）なにか理解できない（incompréhensible）理由があり、それゆえ諸事物は継起するのであって、一挙には展開してしまわないのだと、我々はたしかに感ずる（137/DI157）」。同様な告白は他にもある（「表現できない（inexprimable）理由（148/DI171）」）。さらに、その後のベルクソンの思索の方向と、『試論』で運動のパラドクスを解決する際の意気込み、広くは『試論』第二章全体への彼の自負を考え併せるならば、上のベルクソンの戸惑いはむしろ、彼の野心を仄めかしているとすら思われる。[5] なぜなら、個体論としてはアトミズムを考えるのが普通であるが、これは空間そのものよりむしろ、数の単位の個体性を援用した個体論である。そして『試論』は単位の個体性を虚構とみて、質的多数性こそ真の個体化だと考えるという方向を打ち出したのである。ならば物質をアトミズムで捉えるのは、虚構を実在と見做すに他ならないということになろう。のちに見るようにアトミズムにおいても「運動の運動」が重要となるが、「運動の運動」という発想が既に『試論』にあったと、後のベルクソンは認めている（1313/PM77）のである。それならば「運動の運動」とは、知覚される運動の根拠となる、物質の質的多数性に他なるまい。結局、物質という客観的実在そのものに特定の部分を個体化する働きを、つまり質的多数性としての運動を認めねばならない。そうなれば当然、空間は客観的な実在ではなく、数を形成する因子のひとつに過ぎないことになる。だがそうである方が、アキレスと亀のパラドクスのベルクソン的解決を徹底できるであろう。我々は『試論』に、空間を客観とみなして落ち着く姿勢ではなく、むしろ空間を人為的媒介とみて、その向こう側に質的多数性を捉えようとする姿勢を見いだすべきであろう。

だが、いまのところ質的多数性は、意識と密接に結びついた過去の保存によって成立している。物質に質的多数性があるなら、ここでの過去の保存は意識を伴うのか否か。『試論』以降のベルクソンは、まさにこの問題に取り組む。一八九三年の形而上学講義（アンリ四世校において行われた。三つの課からなり、第一課は「空間」、第二課は「時間」、第三課は「物質」を、それぞれの題目とする）と一八九六年の『物質と記憶』において、ベルクソンは物質の本性を質的多数性に近づけようとしている。講義は『試論』と同様、意識を伴う質的多数性によって物質における個体化を説明しようとする。『物質と記憶』は質的多数性のみを個体化とする点で『試論』と一貫しており、むしろそのために人格的なものを意識より広義に捉え、意識を物質から剝奪する。この推移において、本論文冒頭に言及した機械論の（就中アトミズムの）、一時的容認がみられるのである。

三、不可分の実体と質的多数性―一八九三年の形而上学講義

講義の物質論は、空間と質的多数性および持続に関する『試論』の規定を基本的には踏襲しながら、客観的な実在を考察している。講義の論述にしたがえば、原子による個体化と質的多数性による個体化は、「我々の知覚の形式（C2.420/TLM34）」すなわち空間と、「知覚の素材（*ibid.*）」すなわち持続各々の根拠として、外界に求められるのである。たしかにベルクソンはこの講義で、知覚の形式（空間）を偏重すれば機械論のアトミズムが、知覚の素材（持続）を偏重すれば力動論のモナドロジーが、全く別個で説得的な物質論として確立できると認めており（C2.424/TLM39）、『試論』より数年前には両者を優劣つけがたいものと述べた[6]。そしてこの講義でも、両物質論の独立した説得力を逆手にとり、その最も突き詰められた形、すなわち「徹底した力動論（C2.436/TLM55）」と「徹底した機械論（C2.425/TLM41）」を検討するのである。そして両者の破綻を指摘し、互いの主張を弱めることにより、調停できる点を見出してゆく。これは一見どちらの物質論にも公平な議論に見える。

だが、『試論』との脈絡をふまえるならば、この講義の主題をもう少し質的多数性を中心にして捉えてもよかろう。すなわち、質的多数性を物質の個体化の原理だとするとき、それが我々の意識における質的多数性とどこで異ならねばならないのか、また機械論の有力さは何に存するのかを探ることが、この講義の主題であると。もしそうならば、上の慎重な公平さは、質的多数性による個体化、「運動の運動」を物質に見いだすための周到さととれるのではないか。それならば機械論の受容は過渡的で、むしろ変更を加えられた機械論のアトミズムは本質的なところで質的多数性にすりかわっているといえるだろう。このような読みを根拠づけるために、持続の客観化と「徹底した力動論」の批判の側から、まずは検討する。

質的多数性は講義において、持続という時間変化に即した個体化の側面を一層強調されている。「…この（意識状態の）継起は、記憶力（mémoire）によって成り立つ状態相互の連続性、各々の状態が相手の中に潜りこみ、保存しあうこと（se conserver）によって、互いに変形しあってゆく過程なのです（C2.412/TLM22）」。持続そのものについては、「空間の言語をかりてたとえるなら、持続は伸びて行く直線ではなく、拡大する円、同じ形でいながら別のものになってゆく円だというべきでしょう（*ibid.*）」と言われる。この譬えは、各状態が全体を反映し、全体の内で区別されるという『試論』の持続の規定をうまく表しており、G. Mourélos が用いた、「変化する浮き彫り（線でなく、奥行を持ったもの）[7]」を思わせる。ここで確認しておきたいが、講義は『試論』における以上に、持続における過去の保存の必要を力説する。「記憶を伴う意識にとってしか持続はなく、持続は現在と過去との比較のみによって始まる…（C2.412/TLM22）」。だが次の箇所にみるように、講義は意識を過去の保存から切り離せないものとみており、この点で『試論』に準じているのである。「…我々が外界の諸現象の継起を目にしたとしても、これらの現象は我々にとって、我々が知覚する間しか存在しませんし、これらの知覚はそれと同じだけの心理状態なのです

(C2.412/TLM22)」。さてベルクソンは、こうした意味での持続に客観性を認めようとするわけである。「私の意識が自分の持続についての感情を持つのであり、私は私の持続しか認識しません。しかし持続がそれしかないということにはなりません。宇宙を私の意識に還元してしまうというのは、極端な観念論者にはお気に召すかもしれませんが、私は彼等に対する反論を試みるでしょう(C2.413/TLM24)」。それならば物質は、意識を持った人格的実体として規定されるだろう。ベルクソンは、あきらかに個体としての意味をこめて、客観的実在を「実体(substance)」と呼んでいる(C2.408/TLM15)。「…諸実体を、ライプニッツが言ったように要約された魂(âmes en raccourci)、つまり原初的で混雑な意識として、我々は想定することになるでしょう(C2.413/TLM24)」。本性上、我々の持続と物質の持続は異ならない。延長について後にみるような本性上の変更はないのである。ここからは、物質の個体性を質的多数性で説明しようという、ベルクソンの狙いが伺える。

ところで、この方向を極端まで進めるのが「徹底した力動論」である。この立場は感覚の質の継起を実在と考え、この継起を「我々の外に投影して客観化し(C2.430/TLM47)」、これだけで物質を説明しようとする。モナドロジーはその一典型であろう。さて、いささかでも量的であるものは、この実在論では「大いなる錯誤(*ibid.*)」となるが、誤って延長として表現されるのは「単純実体の多数性(C2.432/TLM50)」である。つまり延長は、意識的な実体の数に還元されるのであり、逆に「もし力動論が延長とであることがあれば、力動論はこの特性(延長)を、実体の多数性を認めることによってしか保持できません(C2.431/TLM49)」。だが、ここまで徹底すれば延長に存する相互作用も、数の関係に解消してしまう。実体は、意識的活動という意味で「まず第一に能動(action)(C2.433/TLM51)」だと言われるが、他との間の作用(action)という意味での能動を禁じられている。意識事象が実在かどうかはわからないから、「徹底した力動論」は観念論と異ならないという点で破綻している(ベルクソンは予定調和を想定するところまでライプニッツにつきあわない)。「力動論は、宇宙、とりわけ質…の実在性を肯定しておきながら、全ての実体をそれ自身の内に閉じこめ、外への作用を禁じ、宇宙については、突然消えてなくなっても我々の知性はそれを知覚しないようなものとして想い描くにいたるのです(C2.435/TLM54)」。従ってベルクソンは、物質を構成する意識ある諸実体に、相互作用が必要だとみるのである。これは、諸実体の間に、運動を認めることに等しい。ところで、運動を説明するものは機械論であり、その延長実体のアトミズムである。「徹底した力動論」はしかし、延長を排除するのである。よくみると相互作用が完全に消去されるのは、「徹底した力動論」が延長を「数」に還元するからである。ベルクソンは、延長のこうした理解が、機械論にすら破綻をもたらすと言うのである。そして、延長をこのように考えさえしなければ、意識ある実体間の運動、相互作用は可能だとするのである。

そこで、ベルクソンは暫定的に不可分の延長実体を認める。そして、延長実体を主題とする「徹底した機械論」を批判することにより、この実体が持つ量の側面を数に還元し、相互作用を保証する側

面を質にすりかえてしまう。まずベルクソンは空間の無限分割を認め（C2.398/TLM2）、まさにそれゆえに空間の実在論を否定する。空間はカントの指摘するように、無限分割可能性において二律背反を引き起こすからである（C2.402/TLM13-14）。それならば、「我々が空間を使うということ（usage）（C2.407/TLM15）」こそ空間の正体であり、空間は認識の形式だと、カントにならって言う他はないが、この意味での空間は客観的実在（カント流に言えば物自体）と没交渉である。ベルクソンは、この形式を適用する根拠が外界にあるはずだと主張し、物自体について次のような可能性を考えるのである。「物自体が延長を、いわば、想像力によってでなく悟性によって認識されるような延長を、その本質とするというのは、ありそうなことです（C2.408/TLM15）」。客観的延長を認めるとしても、それは空間のように無限分割可能ではあるまい。そこで、ベルクソンは「徹底した機械論」にとっての延長を、アトミズムにおいてとらえる。この立場において物質は、原子あるいは「デカルトの言うように、延長の小片（C2.426/TLM43）」からなるのである。形だけを持つこうした原子が、「機械論の本質的観念（*ibid.*）」となり、知覚の素材をなす感覚の質は徹底して剝ぎとられるのである。徹底するからには、ここでいう形は一定の法則に従う運動で（例えば円は円運動で）あらねばならず、「それ自体が運動であるような部分からなる運動、いわば運動の運動としての変化（C2.427/TLM44）」となるが、この運動すら一切の質を残していてはならず、運動は「ある代数式によって表現される位置変化（C2.428/TLM44）」となる。結局物質は「おのずと結果を演繹して…一定の定理を無際限にある結論と結びつける、数の関係の体系（*ibid.*）」となるのである。ここまで徹底してしまうと、延長実体は数の単位と変わるところがない。「機械論は、物質すなわち延長…を実在としながら、仮説の論理によって延長…を関係の変化に、いわば観念に還元してしまうのです（C2.435/TLM54）」。単位は虚構だという『試論』の指摘がここに生きており、量の側面を強調された延長実体は観念に他ならなくなる。そこで運動、作用を残してやるには、機械論は延長に質を残せばよい（C2.436/TLM55）ということになる。延長は質において捉えられる形、運動、作用となろう。

結局、力動論は延長を、端的に質として見てやればよい（C2.436/TLM55）のである。ベルクソンは実体間の相互作用からなる秩序こそ、延長であると考える。すなわち延長を、「（意識ある）実体の秩序が、我々の知覚に対して、視覚的、触覚的延長の形で翻訳され（C2.437/TLM57）」たものとみるのである。その際、ベルクソンは作用を接触とみることを意図的に避け、このように見るかぎりこゝに量的な媒介が（従って数が）必要となるのだと指摘する（C2.437/TLM57）。相互作用を「遠隔作用（*ibid.*）」「他に対する、一種の電流のような作用（*ibid.*）」と見れば、こうした困難は起こらない。つまり物質全体を「ある実体の状態変化が他に対して磁力の効果によるかのように反響する（C2.438/TLM58）」場と考え、延長とはそこでの秩序に対する一つの解釈だと見做すわけである。従って実体そのものも、「質をかえることのできる実体、作用し、我々が自分の経験においてうけるような作用を受ける実体（C2.436/TLM55）」だと言われることになる。これで一応は、物

質における質的多数性が肯定されたかにみえる。

だが、以上のような解決では、相互作用の秩序の質的多数性と各実体の意識に現れるそれとで、物質における質的多数性は二重化してしまう。物質における個体化には、上のような運動、すなわち相互作用としての質的多数性さえあれば十分で、意識ある不可分の実体など不要ではないか。この事情は、上に見たように、質的多数性と意識の共存を不可避のものとみることに由来する。質的多数性と意識を切り離して考えるならば、不可分の実体は作用の質的多数性に解消してしまうからである。だが質的多数性の二重化を除けば、講義は三年後の『物質と記憶』にかなり近づいている。不可分の実体を排除するだけで、どんな意味でのアトミズムも不要になり、最終的には意識なしの運動、相互作用の全体が、個体化の原理として樹立されるのである。たしかに、自分のために用いてもよさそうな「運動の運動」という表現を、講義の物質論が機械論に託したままでいるのは、ベルクソンがこの物質論を完全なものと見ていないからであろう。ベルクソン自身の言うように、「運動の運動」という観念を精密に規定する任務は『物質と記憶』に負わされるのである（1313/PM77）。だが、講義の物質論が『物質と記憶』の基礎を固めたとは、たしかにいえる。

四、質的多数性と意識の分離――『物質と記憶』の物質論

『物質と記憶』では、講義に比べて物質論がはるかに単純になる。物質は、知覚と共通する「イマージュ（image）」の名で呼ばれるが、イマージュにおいて実体は作用に還元されるのである。「ある実体の状態変化が他に対して磁力の効果によるかのように反響する」と言う代わりに、『物質と記憶』はこう述べる。「実在としてのイマージュは自己の各点によって他のイマージュのあらゆる点に働きかけ、…各作用にはかならず、等しいが対立する反作用を返し、結局広大無辺の宇宙に諸変化が伝わって行くための通路にすぎない（186/MM33）」。『物質と記憶』におけるこうした物質の規定は、質的多数性そのものから意識を切り離すことによって成り立っている。

両者の分離の役割を果たすのが、「我々が生きる、つまり行動する必要（333/MM221）」である。『物質と記憶』において、意識は「生きる必要」に従属する。そして生命は、物質と異なる原理と見做されているのである。イマージュとしての物質に意識はない。従って物質における質的多数性と、意識における質的多数性との相違は、まさに意識の有無によって説明される。「この二つの項の相の差は、ある意味で無際限な振動の多数性を、瞬間を区切るにはあまりに短い持続の中に凝縮せねばならないせいで生じているはずである（340/MM230）」。我々は物質における質的多数性を、我々の知覚する質的多数性に、凝縮によって変換するのである。凝縮とは、生きるに不必要なイマージュを一部隠蔽することであり、それこそ意識の役割なのである（186/MM33）。

こうして、実体と作用を区別する立場は、意識に拘泥しすぎたものであることがわかる。ベルクソンによれば、実体と作用との区別を説得的にみせるのも、「生きる必要」なのである。生体維持の欲求にしたがって「感覚される実在から切り取られた諸部分の間に、

全く特殊な関係を打ちたてることこそ、生きることに他ならない（334/MM222）この観点からすれば、「なるほど生命の保存は、我々が日常生活のなかで、不活発な事物とこの事物により空間内で行われる作用とを、区別するように要求するだろう（335/MM224）」。講義の物質論のように、「相互に独立で、ある種の人格にも比すべき個体性を持った対象（332/MM219-220）」の「どれが動き、どれが止まっているか（332/MM219）」を問題とするのは、『物質と記憶』によれば誤りであり、個体化には全体における相の変化がなくてはならないのである。

では連鎖の全体に対する意識なしに、質的多数性はいかに存立するのか。ベルクソンは無意識な状態の自存を認めている。「…意識が現在、すなわち現実に生きられるもの、作用しているものを特徴づけるならば、作用しなくなったものは意識に属することをやめても、何らかの仕方で存在することまでやめはすまい（283/MM156）」。『物質と記憶』においてはじめて、持続は意識も物質も包括する、まさに全体における変化であることがほのめかされる。それに応じて、持続における過去の保存の側面が重要性をもつことになる。精神において、過去の保存の役割を担うのは記憶力（mémoire）に他ならず、ベルクソンのこの著作の大半は、記憶力と記憶内容についての研究に費やされているのである。この記憶論が、物質における無意識な過去の保存を認める見解に少なからず貢献している。だが記憶論についてはここに詳細を追わず、物質と記憶力の関係についての次のような論述を確認するにとどめたい。「精神には）記憶力が一つの機能として介入してくるが、これについて物質は何ら予兆を持たないわけでなく、すでに物質なりにこれを模倣していないわけでもない。物質が過去を思い出さないとすれば、それは物質が過去を絶えず反復するからだ（356/MM250）」。精神が無意識の記憶内容をもち、物質が反復という形で過去をとどめる以上、持続そのものは意識や物質より規模の大きいものだと言わねばならない。ただし『物質と記憶』は、持続についてこれ以上論を進めない。確認できるのは、記憶をめぐって持続が意識と切り放された以上、物質、つまり作用反作用の織りなす質的多数性の、一定の持続のリズム（343/MM233）こそが、物質における個体化の原理だということである。

『試論』において、あらゆる質的多数性は、心理的生の持続に参与するかぎり、内的に個体化された。『物質と記憶』以降、持続はより規模の大きいものと見なされ、これに参与するかぎり、物質や生命は、運動すなわち質的多数性として個体化されることになる。結局、物質は意識なき質的多数性であり、反復運動である。生命は物質とは独立な原理であり、これが生物の意識と、その意識が捉える質的多数性とを決定することになる。そして物質は、この生命原理に、最小限必要な個体性を提供するのである。実在としてのイマージュが変化の通路だというのは、まさにこの意味においてである。物質における各々の運動は、全体としての運動のイマージュの内で個体化される。「物質の一定部分にどうして位置変化がおこるのかでなく、どうして全体の内に相（aspect）の変化が起こるのかが重要なのだ（332/MM220）」。このように物質そのものを巨大な反復運動と見るかぎりでは、「運動は一個の絶対である（332/MM219）」

と言えるのである。ゼノンのパラドクスには、こう答えれば十分だということになる。「エレア派の指摘した難問あるいは矛盾は、運動そのものにではなく、むしろ精神による運動の、作為的で長続きしない再組織化にかかわるのである（328-329/MM215）」[8]。

五、結びにかえて

以上に見たように、ベルクソンは物質における個体化にとっての、持続における質的多数性の重要さを認め、まずはこれを主観的に把握される運動としたのであった。講義は機械論を肯定するかにみえるが、それはベルクソンが自己の物質論を確立する準備段階においてであった。結局、物質は一つの運動として、持続に関わるかぎり、要素的運動を個体化することになる。ところで、ベルクソン哲学の核心は恐らく生命論であり、それは一九〇七年の『創造的進化』に展開される。我々は、B. Gilson のように、精神と物質においては緊張度を異にする持続が個体化の原理であり、生命現象は両者の交流だと見る立場を採りたい[9]。生命にとっての障害と見える物質は、無時間で一様な塊として任意に分割されるのでなく、それ独自の持続における個体化に即してこそ克服され、利用されることになる。こうした生命論は、持続という一者の分化と創造によって、多の発生を説明しようとするものである。生命論に至って、個体化の原理は持続のみに限定され、そのさまざまな現れとして、物質、生命等の質的多数性＝運動が捉えられるようになる。本論文では意図的に詳述しなかった記憶についての探求が生命論を準備する鍵の一つとなるのだが、物質論を一種の個体論とみることも、ベルクソンの生命論を知る上ではきわめて重要だと思われる。

凡例

以下の略号により、Quadrige 版のベルクソン著作のページを示す。DI:『意識の直接与件についての論論』／MM:『物質と記憶』／PM:『思想と動くもの』。特に略号のない番号は、次の著作集におけるページである。*Œuvres*, Paris, PUF, 1954. また以下の略号により、講義集のページとそれに含まれる特定講義のページを示す。C2: *Bergson Cours* II, éd. par Henri Hude, Paris, PUF, 1992./TLM: Trois Leçons de Métaphysique au Lycée Henri 1893', *Cours* II, pp395-438.

注

（1）H. Hude, *Bergson*, Paris, éditions universitaires, 1990, p33. もっとも、講義を射程に入れた彼の解釈は示唆に富むものである。

（2）B. Gilson にこの見解が見られるが、彼の『試論』では精神が物質を個体化する」という主張は少し強すぎると思われる。cf.B. Gilson, *L'Individualité dans la Philosophie de Bergson*, Paris, Vrin, 1985, pp88-89.

（3）位置すら「精神の単純な行為」が区別するのであるから、A.R.Lacey のような、「『試論』は空間だけが数における区別の原理だと見ている」という批判はあたらない。cf. A.R. Lacey, *Bergson*, London, Routredge, 1989, pp20-22.

（4）『試論』に、例えば「アキレスの場合は行為に意志があるから一歩が確定できるのだ」といった見解を見るべきではあるまい。そうするとA.R.Laceyのように、「では矢に意志があるのか」と問わねばならぬことになる。cf.A.R.Lacey, *op.cit.*, pp35-36.『試論』は、意志でなく主観的な質的多数性による、自他を問わぬ運動の個体化を主張するはずである。

（5）例えば「亀の各々の歩みは運動としては不可分であり、空間としては異なる大きさである（76/DI84）」というのは、空間の無限分割可能性と矛盾するような論述であり、不用意の謗りを免れないが、それも勢い余ってのことではなかろうか。これについてのA.R.Laceyの解釈は、運動の全行程が空間ではなく、一歩は全行程の部分としてのみ特定化されている、というものである。cf. A.R.Lacey, *op. cit.*, p34。しかしそうなれば結局、物質もその運動も、質的多数性とみなされることになろう。

（6）G.Mourélos, *Bergson et les Niveaux de Réalité*, Paris, PUF, 1964, p96.

（7）cf. *Bergson Cours* Ⅰ, éd. par Henri Hude, Paris, PUF, 1990, p332.
どちらかといえば力動論を、このとき（1887-1888）のベルクソンも正しいものとみている。

（8）ベルクソンは、静止で運動を構成できないという矢のパラドクスもこの一言で批判するが、ベルクソンにおいて静止は運動の要素と等質ではないのである。

（9）B. Gilson, *op. cit.*, pp88-89.

（ながの・たくや　筑波大学大学院哲学・思想研究科）